

今号の

特集
1

笑顔のバトン

三沢母子愛育班が結んできた地域との絆

山形県で唯一の母子愛育班である「三沢母子愛育班」。三沢地区（小野川・赤芝・築沢）の子育てを見守り続けて、今年で47年目を迎えました。この特集では、子育てに伴う悩みや孤独に優しく寄り添い、地域との絆を結んできた三沢母子愛育班の活動を紹介します。

■問合せ／健康課母子保健担当 ☎ 24-8181

三沢母子愛育班は 大切に守りたい地域の活動

昭和48年に結成した三沢母子愛育班は、長い間、地域の母子保健に向き合ってきました。日頃の活動は、三沢地区に住む方々への見守り・声掛け、地元保育園や学童との交流、母子に対する研修会、健康課が行う妊婦・乳幼児訪問への参加などです。また、お年寄りに対して健康に関する研修を行うこともあり、親子のみならず、子どもを取り巻く環境に広く目を向けながら、地域と積極的に交流を行っており、その活動は全国からも評価されています。先輩保健師から代々引き継がれ、保健師の中でもとても大事にされてきた活動です。

三沢母子愛育班の活動は、基本的に班員による自主的なもので、私たち健康課はバックアップする形で関わっています。加えて、行政の強力なパートナーとしても重要な役割を担っているんです。例えば、悩んでいるお母さんに対して、保健師の目が行き届かないような場合に、班員の皆さんの見守り活動が行政のサポートにつながった事例もありました。地域の声に寄り添って自主活動をしたり、行政の橋渡しになってくださったりと、とても頼りになる存在です。

私たち保健師は、核家族化が進んだ現代や、コロナ禍により外出が制限される状況下で、母子の孤立化を心配しています。今だからこそ、三沢母子愛育班の声掛けや見守りが大切だと感じています。一部地域の活動ではありますが、これまで長く続けてこられたのは、地域の理解と協力、そして班員の活動に対する気持ちがあってこそです。その思いを私たちも大切にしたいですし、今後も長く続いてほしいと思う活動です。



健康課母子保健担当
主任 佐藤麻希



生後1か月の杉沼穂季くんを温かく見守る三沢母子愛育班の小竹タズ子さん(左)と班長の松隈富美子さん(右)。

【11月16日(月)撮影】

母子愛育班とは

昭和8年の上皇陛下ご誕生をきっかけに実施された母子の保健と福祉のための活動のひとつで、特に農村部での乳児死亡率の低下を目的として全国に広まった組織です。三沢母子愛育班は昭和48年から活動を開始しました。



見つめてきた三沢地区の47年

発足から今年で47年目を迎える三沢母子愛育班。地域の子育てを見守ってきた愛育班は、どのような活動を行っているのでしょうか。ここでは、その主な取組内容と班員へのインタビューを紹介します。



三沢母子愛育班のマーク
「三沢の花 エンレイ草」

Interview 見つめてきた三沢地区の子育て

**愛育班員になって25年
赤ちゃんの成長を見守り続ける**



三沢母子愛育班 班員
小竹 タズ子 さん(小野川町)

平成7年に愛育班員となった小竹タズ子さん。活動の第一線からは退いたものの、79歳となる今でも愛育班のメンバーとして三沢地区の子育てを見守っています。

「最初は、以前班長をされていた人から頼まれて愛育班に入ったのですが、地域の人の協力や声かけもあり、現在まで続けることができました」。

小竹さんが今も続けている「赤ちゃん訪問」では、新生児が生まれた家庭に保健師と一緒に訪問して、赤ちゃんの身長や体重を聞き取ったり、愛育班員手作りのスタイなどを渡したりしています。この訪問は、三沢地区でお母さんになった人と班員との顔合わせも兼ねており、地域の中で、お母さんが孤立しないようにコミュニケーションを図る機会ともなっています。

「訪問の時に、赤ちゃんだった子が

地域に根付く 三沢母子愛育班

「愛育班」は、昭和11年に恩賜財団母子愛育会の指導で始まった住民によるボランティア組織です。

本市の三沢母子愛育班は昭和48年に結成され、今年で47年目。班員は、会員の中から選出された家庭の主婦で構成されています。現在、班長の松隈富美子さんの他、13人が所属し、日常生活における健康上の困ったことや改善したいことなどを、地域社会のつながりや情報交換の中で確認し合い、母子の保健を中心に、地域全体の健康づくりを進めています。

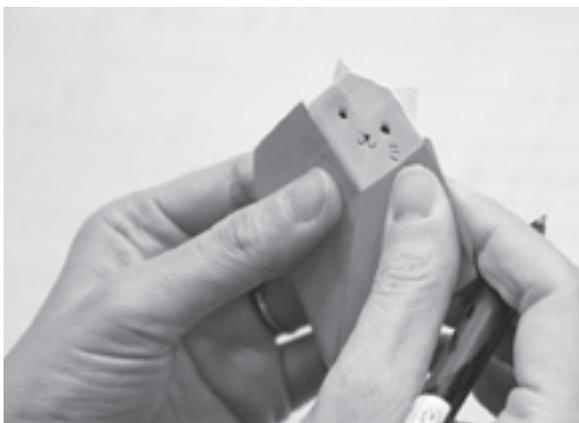
今年度は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、大きなイベントはできませんでしたが、例年は「班員研修会」や「学童保育施設との交流会」、「赤ちゃん訪問」(6頁下部に内容記載)などを行い、地域の母子保健や福祉の向上に取り組んでいます。

特に、10月に開催される「三沢地区親子交流会」には例年多くの住民が参加し、親や子ども同士で、折り紙や季節の催しなどを楽しんでいます。

取材中にお聞きした「今年はお母さんの交流会がなくて残念」というお母さんの声からも分かるように、愛育班の活動の一部は「地域の恒例行事」という側面もあり、三沢地区内では地域に根付いた組織として広く知られています。



10月29日(休)、三沢母子愛育班の皆さんが三沢コミュニティセンターに集まり、「愛育だより」の発行作業と、一緒に配布する折り紙の制作を行っていました。一つ一つ、丁寧に作られる折り紙には「子どもたちに喜んでもらいたい」という願いが込められています。



成長していく姿を見ると、やっていて良かったなあと感じます。これまで見守ってきた子どもたちが登校するときに、「いつてきます」と大きな声で言ってくれる度に、とてもうれしくなります」。

小竹さんが愛育班員となって、今年で25年。平成14年度から18年度までの4年間は班長も務め、市内で児童虐待を予防する研修会なども開催してきました。平成26年の4月には、小竹さんの班員としての地道な取り組みが評価され、愛育班員の全国大会で母子愛育会の会長表彰を受けました。

今の子育てで大切なこと

子どもたちを取り巻く環境の変化を長年にわたって見続けてきた小竹さん。最後に、「今の子育てで大切なこと」を伺いました。

「共働きの家庭が増えている昨今、お母さんだけが子育てを抱え込み、孤立してしまう場合があるようです。頑張りすぎは良くありません。悩みがあったら、私たちや保健師さんなど、誰かに相談することが大切です」。

お母さんが悩みごとを気軽に相談でき、地域とのつながりを感じさせてくれる三沢母子愛育班。少子高齢化や核家族化が進む現在、私たちが安心して子育てを行うためには、小竹さんをはじめとする愛育班の存在が、一層重要になってくるのかもしれない。



制作した愛育だよりと折り紙を配布する小竹タズ子さんと、受け取る鈴木慶さん・杏ちゃん親子（11月1日(日)撮影）

子育てをみんなで見守る地域

三沢母子愛育班は、保育園や学童、地区文化祭、コミュニティセンターでのイベントなどで、長きにわたり地域の人々と交流しています。今では地区の誰もが知っている愛育班の活動を、子育て中のお母さんがどのように感じているのか、お話を聞きました。

Interview 子育てをみんなで見守る地域

**三沢母子愛育班の方は
本当のおばあちゃんのように**

小野川町で3姉妹の子育てをしている鈴木慶さんは、三沢母子愛育班が活動している三沢地区は「子育てをみんなで見守っている地域」と感じていると言います。

取材に訪れた日は、三沢母子愛育班が発行している「愛育だより」が発行される11月1日(日)。小野川中分班の班員である小竹タズ子さんが、慶さんと娘の杏ちゃんに手渡しをしました。小竹さんのことを、子どもたちは皆「小竹ばあちゃん」と呼んでいるそうです。慶さんは「子どもたちが本当のおばあちゃんのように慕って、よくお家に遊びに行ったりしています。目をかけてもらって、ありがたいです」と話します。慶さんのお子さんは一番上の子が11歳で、子どもたち自ら外に出て遊ぶことも多いと言います。「子どもが外を出歩いたりしていても、愛育班の小竹さんをはじめ地域の人が見守ってくれているので、安心して遊ばせることができます」と、慶さんは話しました。

**地域の行事が少なくても
そのつながりは続いています**

「本当なら今日は三沢文化祭の日だったんですよ」と残念そうに話す慶さん。新型コロナウイルス感染拡大



鈴木慶さん・杏ちゃん親子
(小野川町)

防止のため、今年は地域行事の中止が相次いでおり、三沢母子愛育班の活動も、今年は縮小しています。慶さんは、そのような状況においても、三沢母子愛育班の存在は支えになっていると話します。「地域の行事がないのは残念ですが、なくても愛育班の方々のつながりは続いています。三沢地区は地域のつながりが深く、学校を通さなくても、親同士がつながっています」と言い、それはこれからも続いていくと話しました。

健康課の保健師が赤ちゃんが生まれた家庭全戸に対して行う「赤ちゃん訪問」も、三沢地区では愛育班員とタッグを組んで行います。「初めまして」と出会ったその日から「大きくなったね」と声を掛け、我が子の成長を身近で見守り続けてくれる地域の人がいることは、親にとっても、大変心強いことではないでしょうか。



おやこ広場での体重測定 (R1.7.26)



どんぐりクラブとがんづき作り (R1.6.3)



班員研修会で今後の活動を話し合う (R1.12.8)



地区文化祭にてみんなでハロウィン (R1.10.4)



赤ちゃん訪問の際に渡されている班員手作りのスタイとハンカチ

特集のタイトル「笑顔のバトン」は、平成26年4月16日に開催された第46回愛育班員全国大会で優秀作として入選した手記からいただきました。当時の班長山口道子さんが綴ったものです。そこには次のように記されています。「どうして過疎・少子高齢化が進むこの地区に愛育班が設置されたのかずつと気になっていました。(中略)自然豊かな土地柄とそこに住む人々の穏やかな人柄、適したリーダー的人材に恵まれたことなどをお聞きして、とても嬉しくなりました」。

三沢母子愛育班が活動してきた47年の長い間に、過疎・少子高齢化が進んだほか、社会変化の波がありました。東日本大震災が起こった際には、三沢地区へ避難した妊婦のサポートに尽力したという愛育班。様々な状況下で、班の活動が時代に柔軟に対応し、続けていることは、班員の皆さんによる努力の賜物であることはもちろん、子育てや三沢地区に対する強い思いがあるからこそです。また、親世代が三沢母子愛育班として活動し、自分もまた次の世代の見守り活動を行っている班員もいます。親から子へ「笑顔」をつなごう、自然と「笑顔」になれる子育てを目指そう、そして、これからも班活動を「笑顔」で続けていこう。そんな願いを込めた「笑顔のバトン」が渡されて行くでしょう。

「笑顔のバトン」をつなごう



妊娠・子育てに関する不安や悩みは
子育て世代包括支援センターにご相談ください

母子保健コーディネーター(保健師・助産師)が妊娠や子育て中の不安や悩みを、地域の専門家などと連携しながらサポートしています。どうぞ気軽にお声掛けください。

※子育て包括支援センターは健康課にあります※

■場所・連絡先/米沢市西大通1丁目5-60
(すこやかセンター内) ☎24-8181

健康課母子保健担当
主任 佐藤 麻希

おやこ広場に
来てみませんか?

- 日時/12月25日(金)
13時30分~(2時間)
- 対象/生後6か月までの子、妊産婦
- 内容/体重測定、個別相談(助産師、栄養士、保健師)

「おひるねアート
もあるよ!」

